TANAKA HIROFUMI
PRESENTS

RAKUGO
THE
FUTURE

JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

第23回:迷宮物語

文:田中啓文

（今回、本当にめちゃめちゃな内容なのであきれないように）

本日は奈良県明日香村からの中継です。

春爛漫。桜満開。花より団子。

というわけで、春は和菓子のシーズンだ。日頃、ケーキだタルトだムースだヘアトニックだと洋菓子しか食べていない皆さんも、桜の木の下ではらはら散る桜の花びらを仰ぎ見ながら、和菓子を食べよう。「仰げば尊し和菓子の恩」。最近は、ＮＨＫの朝の連ドラ「あすか」の影響か、ちょっとした和菓子ブームだそうだ。私も時々見たが、ここ明日香村に生まれた謎の少女が、ショッカーを壊滅させた本郷猛と菓子勝負をして敗北し、青森に去る……というようなストーリーだったように思う。そんなことはどうでもいい。とにかく、和菓子というものは、今、おしゃれでトレンディなのである。日本人なら、美しく形作られたさまざまな菓子を、眺めているだけでも、何となく言祝ぐというか、幸せなおめでたい気分になるものだ。

「そうかあ……」

う……誰だ、今、言ったのは。

「わしや、わし」

あ、あんたは「けんげしゃ茶屋」（註１）に出てくる、正月に不吉なことばっかり言う旦那。

「和菓子が幸せでめでたいやなんて誰が決めた。あんな不吉なもんないで」

そうでしょうか。この明日香村の満開の桜の下で食べる、ほんのり桃色の桜餅など、何ともおめでたい……。

「桜も血……めでたい席に血とは不吉な……」

こじつけもいいところでしょう。それをいうなら、たとえば……。

「そや。屑も血、臭も血、妖も鬼も血……どれも血の臭いと味のする忌まわしい菓子や」

大福なんか、大きな福が来るというおめでたい名前で……。

「大怖苦か。あれは、大きな恐怖と苦しみが来る」

みたらし団子は？

「見たら死んだ子？　水子の霊やな」

むちゃくちゃや。

「他にも、どらや鬼、たいや鬼、妖棺、禁唾、土饅頭……和菓子はおぞましいもんばっかりや。ああ、縁起わるー」

はいはい、もう、ええ。わかりました。ところで、旦那はなんでこんなところに？

「この明日香村に、謎の遺跡が発見されたと聞いたからじっとしとれんようになってな。何を隠そう、わしは遺跡マニアでな。遺跡ときいたらどうしても欲しなる性分なんや。これまでにも、二十幾つかの遺跡を買うたで。ここの遺跡もわしが買い取ったろとおもて、土地の持ち主と交渉に来たんや」

遺跡を収集するのが趣味なんですか。

「そや。遺跡トラクターや」

それは、遺跡コレクターでしょう。

「とにかくその遺跡を今から見ようと思って来てみたんや。君も行くか」

ええ、ぜひお願いします。お供します。で、どんな遺跡なんですか。

「聞いたところやと、どうやら、古代のスポーツコロシアムみたいなもんやったらしい。あるスポーツがそこで行われてたみたいなんや」

あるスポーツ？

「野球や、野球」

はあ？　まさか……。

「いや、ほんまやねん。そこから出土した土器やら石板に、ボールみたいなもんを投げてる人間の姿と、棒みたいなもんを持ってそれを打ってる人間の姿が描かれとるんや。しかも、その土器がどう見ても日本のもんやない。地中海文明の影響が顕著なんや」

もし、本当だとしたら大スクープだ。ぜひ案内してください。……ははあ、ここですか。ひらがなで「いせき」と書いてあるからまちがいないでしょ

RAKUGO THE FUTURE

第23回：迷宮物語

文：田中啓文

う。地下へ降りる階段みたいなものがありますなあ。どうしましょう。
「降りてみよ」
　危なくないですか。落盤とか……。
「わからんけど、虎穴にいらずんば虎児を得ずや」
　旦那はどんどん先にたって降りていく。こうなったら一蓮托生だ。
　地下についた。何ともいえない暗くて狭い廊下が続いている。
「おい、早う来んかい。こら、どうやらずっと先まで続いてるみたいやぞ」
　廊下は幾重にも折れ曲がり、右へ曲がったら左に折れ、急に後戻りするといった具合で、これはまるで……まるで……。
「迷路みたいやな」
　そう、まさに迷路だ。もしかしたら、とんでもないところに足を踏み入れてしまったのではないだろうか。
　何かを踏みつけた。ぼってりした黒い、ねちゃねちゃしたものだ。これは……。
「どうやら動物の糞のようやな」
　ということはつまり……。
　その時、どこからともなく、ぶおおおお……とか、うもももももも……という野獣の雄叫びのようないななきのようなものが聞こえてきた。
　何かがこの地下の迷宮に棲んでいるのだ。ななななななな何だろう……。
「たぶん、牛やな」
　牛？　牛ちゅうたら、あの四つ足でよだれだあーって出してもおおおお……いう、あの牛？
「そうや。今の雄叫びは猛り狂った雄牛のもんや。さっきの糞は牛糞や。太古の時代からこの遺跡に眠っとった悪魔の牛をわしらが解放してしもうたんや。これはどえらいことになったで」
　何でそんなことがわかるんです。
「おまえはあほか。ここが何であるかまだわからんのか」
　そうです私はあほですここが何であるかぜんぜんわかりませんしゃあけどなんであんたにそんなことまでいわれなあかんねん私はべつにあんたの下で働いてるわけでもあんたに借金があるわけでもあんたの子供でもなんでもないのになんでそこまで言われんならんのやだいたいあんたは……。
「まあ、そう興奮すな。ここはな……まちがいなくクレタ島や」
　はあ？
「知らんか、クレタ島」
　クレクレタコラ？
「ちゃう」
　暮れた暮れた日が暮れた。
「ちゃう。おまえはほんっっっっっっっっまにあほやな。クレタ文明とかミノス文明ちゅう言葉を聞いたことあるやろ」
　ない。
「ほんまはあるやろ」
　ない。
「ちょっとはあるやろ」
　ない。
「実はあるやろ」
　ない。
「あのなあ、エーゲ海にあったクレタ島ちゅう島を中心に紀元前２０００年頃に栄えたんがクレタ文明や。クレタ島にあったクノッソス神殿の地下には、ラビュリントスという巨大な迷宮があって、これが今の迷宮（ラビリンス）ゆう言葉のもとになっとるんや。ここまで言うたら思い出したやろ」
　いいや。
「ほんまは思い出したやろ」
　いいや。
「ちょっとは思い出したやろ」
　いいや。
「実は思い出したやろ」
　いいや。
「迷宮には、ミノタウロスちゅう巨大な牛頭人身の化け物が棲んどってな、迷い込んだ人間をＪビーフにしとったんや。さっきの吠え声はまちがいなくこのミノタウロスのもんや」

RAKUGO THE FUTURE

第23回:迷宮物語

文:田中啓文

で、でも、日本の明日香村の地下にそんなもんがあるのはおかしいのでは。ここが迷宮であるのはわかりますが、クノッソス神殿やと断言する根拠はあるんですか。

「直感や」

あほな。

「しいていえば根拠は一つある。さっき、牛の糞が落ちてたやろ。クソのっす神殿……」

は？

「……ちゅうこっちゃ。わかったか」

わかるかいそんなもん。

と、我々がもめていると、突然、目の前がひらけ、そこには広大な広場があった。半分近くを覆う緑の芝生といい、周囲を取り囲む椅子つきの壁といい、そのうしろにある巨大な照明といい、地下にあるとはとうてい思えない規模のものだ。そして……。

そこには牛がいた。のんびりと芝生をはんでいる。いわゆる牛乳石鹸の箱に描いてあるような、真っ白な巨体に黒いだんだらがある乳牛だ。なんとその黒いだんだらは、牡丹の花びらの形をしており、1、2、3……全部で八つある。

牛の横には、一人の女性が立っていた。まだ若い、和服を着た美しい日本人だ。

あ、あなたはどなたですか。

「わらわは牛めずる姫君こと件姫。ここなる牛はミノタウロスの子孫で八房と申す」

何かどこかで聞いたことあるな……。

「さもあらん。わらわの物語、滝沢牛琴なる戯作者が著した『南総里見八牛伝』なる書物に詳しゅう書かれておるゆえ」

あ、そうか、八犬伝と似ているのだ。

「わらわは、ここ大和国明日香村の地下に広がるこの迷宮において、牛の八房とともに暮らしておったが、わらわに恋するアテナイの王子テセウスがわらわに放った一発の弾丸によって、ああら不思議やな、わらわの胸にかけてあった数珠がちぎれ、八つの白い珠がばらばらに飛び散った。その珠を持った八人の若者が、今、ここに、里見家を復興させる戦いをはじめるべく集ったのじゃ！」

え？　何やらわけのわからん雲行きに……。

と、見る間に、広場のあちこちから、白いユニフォームに身を包んだ八人の若者が飛び出してきた。彼らは手に手に白い珠を一つずつ持っている。だが、それは……野球の硬球ではないか。

一人が、一本足で立ちながら叫んだ。

「仁の球持つ王貞治！」

もう一人が、いわゆるひとつの……と呟きながら叫んだ。

「義の球を持つ長嶋茂雄！」

もう一人が、ベース間を疾走しながら叫んだ。

「礼の球持つ福本豊！」

もう一人が、わしは月見草と呟きながら叫んだ。

「智の球を持つ野村克也！」

もう一人が、アデランスを外しながら叫んだ。

「忠の球持つ衣笠祥雄！」

もう一人が、投げたらあかん、と呟きながら叫んだ。

「信の球持つ鈴木啓示！」

もう一人が、神様仏様と呟きながら叫んだ。

「孝の球持つ稲尾和久！」

もう一人が、マサカリを振り回しながら叫んだ。

「悌の球持つ村田兆治！」

そして、全員が一斉に声を揃えて、

「八人そろって八牛士！」

あんまり語呂はよくない。おそらく八人とも、身体のどこかに牡丹の花の形をした痣があるのだろう。彼らはいきなり、バットの素振りや投球練習をはじめた。

TANAKA HIROFUMI
PRESENTS
RAKUGO
THE
FUTURE
JAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

RAKUGO THE FUTURE

文：田中啓文

第23回：迷宮物語

「そ、そうやったんか、ここが……この迷宮が、世界の野球の発祥の地やったんや。やっぱり噂は正しかったんや……」

けんげしゃの旦那がそう呟いた。

ここが、野球と関係のある迷宮であることはわかりましたが、でも野球の発祥の地かどうかは……。

「いや、まちがいないやろ。やきゅう、いうのは、八牛（やぎゅう）から来たにちがいない」

そ、そうだろうか。

「しかも、あの八人は、迷宮界入りしてるやつばっかりやないか！」

それは、名球会では……。

「おほほほほほ。八牛士よ、里見家の再興のため、敵を倒すのじゃ。敵はほれあそこにおる二人じゃぞえ」

どう見ても狂っているとしか思えない件姫がこちらを指さした。や、やばい……。

八牛士の一人が、バットを剣がわりにして向かってきた。

「八牛新陰流八牛剣の恐ろしさ、見せてくれるわ」

そして、突然、振りをつけて歌い出した。

「やあぎゅううすうるなら、こういうぐあいにしやしゃんせ……」

そ、それは八牛剣ではなく、野球拳では……。

「アウト！　セーフ！　よよいのよい！」

何と、こういうお茶屋遊びには異常に強いけんげしゃの旦那が勝ってしまった。旦那は調子にのって狐拳だのまくら拳だの軍人拳だのをはじめて、八牛士をことごとくうち破ってしまった。

「お、おのれ、このままではすまさぬぞ！　行け、ミノタウロスよ！」

件姫が八房をけしかけると、今までおとなしかった八房は目を血走らせ、口からあぶくを噴いて、前脚で地面を引っ掻き、こちらへ突進してきた。えらいこっちゃ。しかし、旦那はあわてもせず、持っていた赤い布と闘牛用の剣（なぜ持っていたかは不明）で巨大な牛を一突きで倒してしまった。

こうして、我々は奈良県明日香村の地下にある古代野球遺跡から脱出したのだった。

え？　巨大な牛の死体はどうしたかって？　そら、もちろん食べました、焼き肉にして。ミノタウロスだけに、ミノ・タン・ロースがことに美味であったことよ。

（註１）

「けんげしゃ茶屋」は、げんをかつぐことを異常に気にする芸者国鶴とその一家に対して、不吉なことばかり言っておもしろがっている旦那が主人公の上方落語。こういう註をつけると、何となくラクゴ・ザ・フューチャーという気分になるでしょ。